

妊娠分娩産褥と成人病 -妊娠中毒症と腎透析-

研究協力者

東京女子医科大学母子総合医療センター

共同研究者 同大学第2病院産婦人科

中林正雄
 村岡光恵

【要約】

腎透析を受けている女性では高率に妊娠中毒症（以下中毒症と略）の既往があることが知られている。しかし中毒症と腎透析に関する詳細な解析はこれまで行われていない。本研究では腎透析患者に対してアンケート調査を施行し、既往の中毒症と現在の腎透析との関連性について検討し、さらに中高年にいたって腎透析へ移行する妊娠中のリスク因子の抽出を試みた。

腎透析治療中で分娩歴のある婦人40例のうち、中毒症既往が77.5%に認められた。透析開始年齢は、混合型中毒症既往群で最も早く、ついで純粋型中毒症既往群、そして中毒症既往なし群の順であったが、腎疾患診断から腎透析開始までの期間は3群間に差を認めなかった。純粋型中毒症既往群では中毒症既往なし群に比べて、最終出産から腎疾患診断までの期間が有意に短かった。混合型中毒症ではSGA (Small for Gestational Age) 児の割合、早産率が有意に高率であった。腎透析にいたった純粋型中毒症の症状として蛋白尿のみが4.0%と高率であり、この群では腎疾患が潜在している可能性が示唆された。

以上より妊娠中毒症既往は腎透析のリスク因子であることが示された。妊娠負荷が潜在性腎疾患を一時的に顕性化し、中高年にいたって腎疾患顕性化、腎透析にいたる可能性が示唆された。

【見出し語】

妊娠中毒症、妊娠中毒症の長期予後、腎透析のリスク因子

【対象】

東京女子医科大学腎臓病総合医療センターおよび関連施設において腎透析治療中の妊娠分娩の既往のある女性83例にアンケート調査を施行した。回答は40例（回収率48.2%）より得られた。

この40例を中毒症既往のない群（ $n = 16$ ）、中毒症既往のある群（ $n = 24$ ）とに分類し、さらに後者を初回妊娠の前より腎疾患をもっていた混合型（ $n = 9$ ）とそれ以外の純粋型（ $n = 15$ ）に分類し検討した。

【結果】

1. 妊娠中毒症の既往と現在の年齢

	例数	現在の平均年齢 ($M \pm SD$: 才)
中毒症既往なし	16	62.3 ± 8.5 *
純粋型中毒症既往	15	56.1 ± 7.5 *
混合型中毒症既往	9	47.9 ± 11.4 *
計	40	56.7 ± 10.5

* 各群間 $P < 0.05$ (表1)

対象全体では現在透析をうけている女性の平均年齢は約57才であるが、このうち中毒症既往のあるものの平均年齢は53才と有意に若く、妊娠前から腎疾患をもっていたもの（混合型中毒症既往）では平均48才とさらに有意に若くなっていた。（表1）

2. 経妊産回数

	経妊回数	経産回数
中毒症既往なし	3.2 ± 1.0	2.1 ± 1.0
純粋型中毒症既往	3.0 ± 1.2	2.1 ± 0.8
混合型中毒症既往	2.7 ± 1.6	1.6 ± 0.7
計	3.0 ± 1.4	2.0 ± 0.9

$M \pm SD$ (表2)

経妊産回数は3群間に差を認めなかった。

3. 初回出産年齢及び最終出産年齢

	初回出産年齢	最終出産年齢
中毒症既往なし	24.4 ± 3.2	28.3 ± 2.8
純粋型中毒症既往	25.3 ± 2.9	30.1 ± 2.9
混合型中毒症既往	23.4 ± 4.4	30.9 ± 5.0
計	24.5 ± 3.5	29.5 ± 3.7

$M \pm SD$ (表3)

初回出産年令、最終出産年令は3群間に差を認めなかった。

4.最終出産と腎疾患診断と透析開始の時期

	最終出産年令(才)	腎疾患診断年令(才)	腎透析開始年齢(才)
中毒症既往なし	28.3±2.8	48.0±10.5**	56.6±8.1**
純粹型中毒症既往	30.1±3.0	36.6±10.6	48.3±6.5**
混合型中毒症既往	30.9±5.0	23.6±8.1	39.2±9.8**
計	29.5±3.7	38.3±3.8	49.6±10.4

M±SD **P<0.01 (表4)

最終出産から腎疾患診断までの期間(年)および腎疾患診断から腎透析開始までの期間(年)

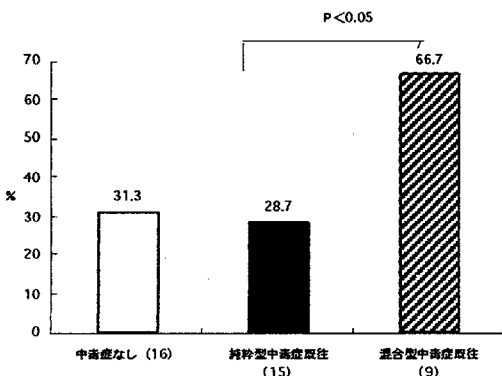
	最終出産から腎疾患診断までの期間(年)	腎疾患診断から腎透析開始までの期間(年)
中毒症既往なし	20.1±10.5*	8.6±8.1
純粹型中毒症既往	6.2±11.6	10.5±11.0
混合型中毒症既往	-6.7±4.1	15.7±9.1

*P<0.05 (表5)

表4に示すように最終出産年令は3群ともに30才前後で有差を認めなかったが、腎疾患診断年齢は純粹型中毒症既往群では37才であり、中毒症既往なし群の48才に比べて、有意(P<0.05)に早かった。透析開始年齢は混合型中毒症既往(39才)、純粹型中毒症既往(48才)、中毒症既往なし(57才)の順に有意に早かった。

表5に示すように最終出産から腎透析までの期間は、純粹型中毒症既往群では中毒症なし群に比べて有意(P<0.05)に短かった。一方、腎疾患診断から腎透析に至るまでの期間は約10年であり、いずれの群も有意差を認めなかった。

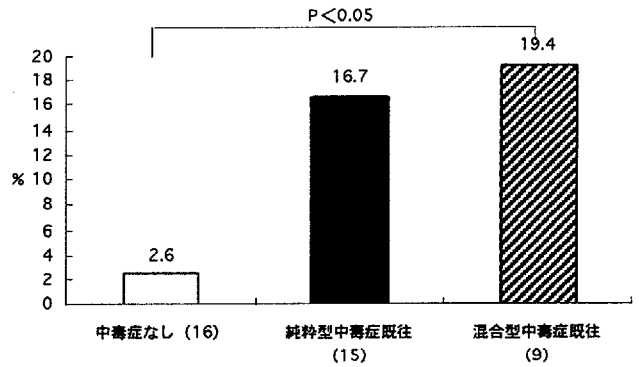
5.SGA児の割合(初回出産)



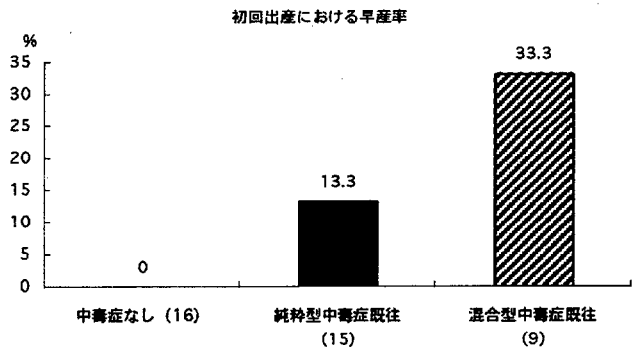
(図1)

初回出産での児発育においては、混合型中毒症で有意にSGAの割合が高かった。

6.早産率(全分娩対)



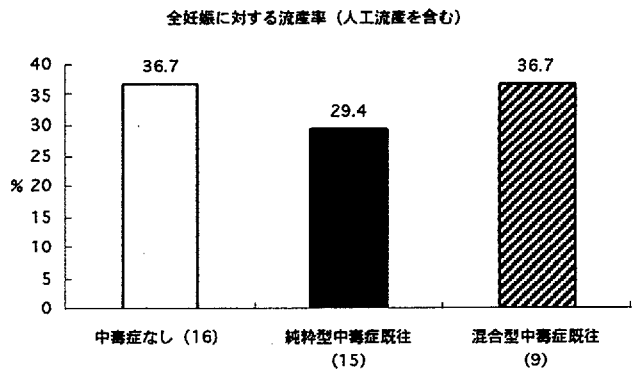
(図2)



(図3)

全分娩において早産率をみると中毒症既往のあるものでないものに比し有意に早産率が高かったが、混合型で特に高率であった。(図2)さらに初回出産だけについてみても同様に中毒症既往なしでは他の2群に比し有意に低率であった。(図3)

流産率(全妊娠対:人工流産を含む)



(図3)

流産率には3群間に有意差を認めなかった。

7. 妊娠中毒症症状の出現頻度

	P	PH	E	計
純粹型中毒症	6	6	3	15
混合型中毒症	2	7	0	9

P：重症蛋白尿、H：重症高血圧、E：浮腫（表6）

妊娠中毒症症状について検討したところ、純粹型中毒症と診断された15例中6例が重症蛋白尿のみであり、重症高血圧のみの症例はなかった。また混合型中毒症においてもHのみの症例はなかった（表6）。

【成績】

1. 腎透析治療中で分娩歴のある婦人40例のうち、中毒症既往が31例（77.5%）に認められた。
2. 経妊産回数、初回・最終出産年令は3群間に差を認めなかった。
3. 腎透析開始年令は、混合型中毒症既往群で最も早く、ついで純粹型中毒症既往群、そして中毒症既往なし群の順であったが、腎疾患診断から腎透析開始までの期間は3群間に差を認めなかった。
4. 純粹型中毒症既往群では中毒症既往なし群に比べて、最終出産から腎疾患診断までの期間が有意に短かった。
5. 混合型中毒症ではSGA児の割合、早産率が有意に高率であった。
6. 腎透析にいたった純粹型中毒症の症状として蛋白尿のみが6例（ $6/15=40\%$ ）と高率であり、この群では腎疾患が潜在している可能性が示唆される。

【考察】

これまで妊娠中毒症既往と成人病との関わりについて検討してきた。その結果、中高年女性の高血圧発症や将来の動脈硬化、心筋梗塞と妊娠中毒症との密接な関係が明らかとなった。すなわち、妊娠中毒症、特に高血圧を有し、子宮内胎児発育不全やSGAを示すものはこれらの成人病のリスク因子となることが示された。そこで今回は妊娠中毒症と、中高年での腎疾患の代表として腎透析に注目し、両者の関連性について検討した。腎透析中の婦人の妊娠中毒症を中心とした既往をアンケート調査により調査した。一般に腎透析の原疾患として捉えられる妊娠中毒症の頻度は0.5%といわれている。しかしながら腎透析中の婦人には原疾患のため不妊であったり妊娠や出産をあきらめなければいけなかったという人も多く、これまで他施設で行われてきたこのようなアンケート調査には必ずバイアスがかかっていた。そこで今回は対象を妊娠出産経験者のみに限って検討した。その結果腎透析婦人と、中毒症との密接な関係が明らかとなったが、検討症例数が十分とはいえ、今後症例数を増加させて検討する必要があると思われた。妊娠中毒症症状による解析では蛋白尿との関連性は明らかであり、また純粹型中毒症でも蛋白尿主体であったことをみると、潜在性の腎疾患が妊

娠負荷により一時的に顕性化し、中毒症という型で出現し、その後消失し、中高年にいたって再び顕性化してきたと考えることもできる。これらのことからや児発育や早産との関わりを解析する必要もあると考える。また中毒症の既往をもたず現在腎透析となっている婦人では、現在糖尿病や高血圧、膠原病などを合併しているものが多いことも明らかとなった。以上のことから、腎透析のような予後不良な成人病へ進む不幸な女性を、妊娠分娩の段階で予測し、予防の手助けとするためには、多数例における詳細な検討がひつようであると考えられた。

【結論】

1. 妊娠中毒症既往は腎透析のリスク因子であることが示された。
2. 妊娠負荷が潜在性腎疾患を一時的に顕性化し、中高年にいたって腎疾患顕性化、腎透析にいたる可能性が示唆された。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【要約】

腎透析を受けている女性では高率に妊娠中毒症(以下中毒症と略)の既往があることが知られている。しかし中毒症と腎透析に関する詳細な解析はこれまで行われていない。本研究では腎透析患者に対してアンケート調査を施行し、既往の中毒症と現在の腎透析との関連性について検討し、さらに中高年にいたって腎透析へ移行する妊娠中のリスク因子の抽出を試みた。

腎透析治療中で分娩歴のある婦人 40 例のうち、中毒症既往が 77.5%に認められた。透析開始年令は、混合型中毒症既往群で最も早く、ついで純粋型中毒症既往群、そして中毒症既往なし群の順であったが、腎疾患診断から腎透析開始までの期間は 3 群間に差を認めなかった。純粋型中毒症既往群では中毒症既往なし群に比べて、最終出産から腎疾患診断までの期間が有意に短かった。混合型中毒症では SGA(Small for Gestational Age)児の割合、早産率が有意に高率であった。腎透析にいたった純粋型中毒症の症状として蛋白尿のみが 40%と 高率であり、この群では腎疾患が潜在している可能性が示唆された。

以上より妊娠中毒症既往は腎透析のリスク因子であることが示された。妊娠負荷が潜在性腎疾患を一時的に顕性化し、中高年にいたって腎疾患顕性化、腎透析にいたる可能性が示唆された。